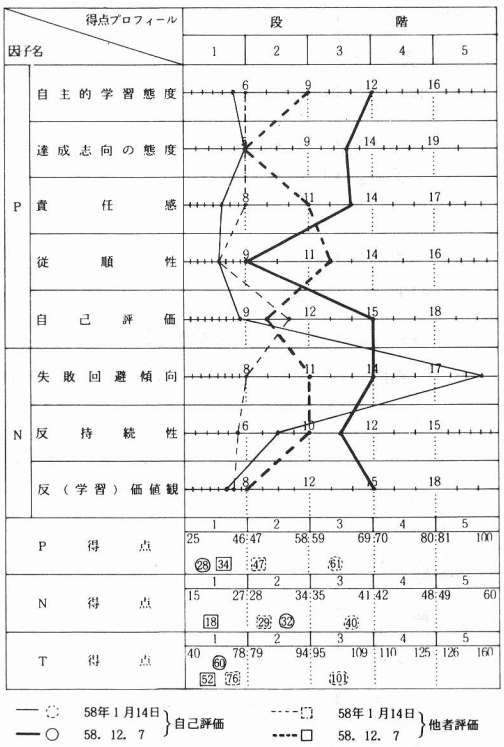
事例8　中学3年H生徒（男子）

1. 学習意欲検査からみた生徒像



(1) 生徒の自己評価は，ほとんどの因子が低段階にありながら，失敗回避傾向が突出しているのが特徴である。学習の価値観，必要感を持たず，しかも自主的に学習計画をたて，それを達成しようとする意志が乏しい。

(2) 教師も，学習意欲全体を低く評価し，授業場面以外の係活動などに意欲をやや認めている。また，対教師の態度を問題にしている。

2. 学習意欲の背景

(1) 知能・学業

教研式知能検査SS51。アンダーアチーバーであり，学業成績は最下位に近い。

(2) 性格検査（YG）　D型

情緒的安定のバランスがとれていない。思考的外向が強い。自分を深くみつめられない。

(3) 問題性予測検査（DAT）

家庭，学校，対人不適応が危険性大でありながら，自己不適応感を抱いていない。また，規範逸脱性が大で，反社会的問題傾向も強い。

(4) 親子関係診断検査など

父母とも問題行動を指摘されたときだけきびしく干渉する。普段は拒否的態度である。

(5) 担任の所見

授業中あきやすく，投げやりな態度を示す。学習用具などの忘れ物が多く，注意されると過度な弁解をしたり，反抗したりする。行動が粗野で協調性がないので，集団の中で認められていない。

3. 心理的治療の仮説と方法

学習の意味，必要性を十分に理解させるとともに，学習意欲の積極的因子を高める。

(1) 日常生活の中で数多く話し合いの機会を持ち，心を開かせ，自己実現への意欲を高める。（カウンセリング的アプローチ，ロール・プレイング，読書療法，箱庭療法）

(2) 教科の内容に応じた学習方法訓練を行い，学力に応じた学習課題に継続して取り組ませ，成功の喜びを体験させて自信を持たせる。（カウンセリング的アプローチ）

(3) スポーツを通して，規則の大切さを理解させ，進んで守る態度を育てる。（運動による治療）

(4) 進路の方向を確認させ，その実現のために望ましい生活習慣を身につけさせる。（カウンセリング的アプローチ，行動療法的アプローチ）

(5) 両親に対し，子供の生活全般に関心を高め，一致した態度で養育するよう働きかける。

4. 治療の実践

(1) カウンセリング的アプローチ

○ 教科担任からの，「真剣に集中して学習に取り組む態度がない。」に対して，「担任の先生には悪いと思う。後悔するが，授業中騒いだりするときはおもしろい。」

○ 昼休み呼びとめたら，「何で俺だけ」，放課後には，「部活があるから」と逃げ出す。